



TITLE:

制欲説の吟味 - 蓄積に関する新見解 -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 制欲説の吟味 - 蓄積に関する新見解 -. 経済論叢 1932, 35(6): 747-767

ISSUE DATE:

1932-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130260>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第六號

第三十五卷

昭和七年十二月一日發行

論叢

制欲説の吟味……………文學博士 高田 保馬
爲替心理説の主張……………經濟學博士 谷口 吉彦
政治算術附地方算法に就きて……………法學博士 財部 靜治

時論

米專賣制の弱點……………法學博士 神戸 正雄
現代社會問題より見たる琉球……………經濟學博士 石川 興二

研究

オーヴァーストンの金融統制理論……………經濟學士 一谷 藤一郎
我國の市町村義務費に就いて……………經濟學士 小山田 小七

說苑

再び貨幣の主觀價值に就て……………經濟學士 柴田 敬
人口動態並行法則を論ず……………經濟學士 三谷 道麿

附錄

新著外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十五卷總目錄

(禁 轉 載)

經濟論叢

第三十五卷 第六號 (通卷第貳百拾號)

昭和七年十二月發行

論叢

制欲説の吟味

——蓄積に關する新見解——

高田 保馬

一

今日、利子理論の最も有力なるものとしては、時差説と制欲説とが一般にあげられてゐる。制欲説はシニオオア以來、數多の派生形態を生じて居り、制欲と云ふ概念すら今は待つこと、又は待忍 (Waiting, Warten) の概念に取りかへられてゐる。而して私はかねてから、此有力なる學説に對して、待つことが苦痛又は犠牲を意味せずと云ふ意味に於て、否定的立場をもちつづけてゐる。

る。此小論に於ては此見方をやや組織的に述べてみたい。ただ此學説は一見明白のやうに見えて其實は極めて複雑のものであり、その或點に至りては極めて難解なるものでもある。私は自分の力で出来るだけの解釋をしてその上に批評を加へ、以て研究の一助としたい。これは私にとつてむしろ覺書の性質のものであることを、はじめから斷つて置く。

制欲説又は待忍説 (Abstinence theory, waiting theory) の名稱を以てよばれるものの中には、前述の如く極めて多様なものがある。けれども私はやはりベエムにならつて、三人の學者の見解を其代表的のものと考えへる。年代の順序から云へば、シニオオア、マアシアル、カアヴァア、これである。けれどもかう云ふ學説史的順序に考察してゆくことは私の欲するところではない。資本の形成、乃至資本用役の供給についてカアヴァアは最も多くのことがらを見てゐる。此限りに於て其見解の中には私の首肯し得るものが極めて多い。これらの理由から私はカアヴァアの見解をまづ吟味しようと思ふ。

その吟味に入るに先だちて、利子の理論に於ける着眼點を考へて見よう。利子も一の價格である。他のすべての價格と等しく、それは需要の側及び供給の側から説明せらるることを要する。従つて利子の理論としての制欲説乃至待忍説も此二の例の何れかを説明するものであるべき運命をもつて居り、而してそれは供給の側を説明するのに役立つてゐる。そこで、生産費説をとればとにかく、さうでない限りは、需要の側の説明が何等かの他の因子によつて行はるべき必要があるや

うである。これ丈を前置きにして論を進める。

二

カアヴァアの利子説は制欲説中にあつて全然特異の色彩をもつものと考へられてゐる。其見解の荒筋は次の如きものである。節約即ち蓄積はある程度まで全然自動的に行はれる。現在財は現在の欲望に充てる爲にのみ使用せられず、又將來の欲望に充てる爲に用ひられるであらう。而して此二の用途の振り分けは兩方の用途に於ける財の限界効用が相等しきやうにせられるはずである。例へば、現在の用途に於ける最後の一グルデンと將來の爲の用途に於ける最後の一グルデンとが相等しき効用をもつやうに。けれども、かく云ふだけでは、未だ正確なりと云ひ難い。多くの人は將來の快樂苦痛を現在の快樂苦痛よりも軽く見る、云はば割引して考へる。思慮乏しき人、浪費者に於てこのことは格別に顯著である。たとへば一年の後に得らるる一五の享樂又は効用を現在に於ける一〇の享樂又は効用と相等しきものと見る。さうすると次の如く考へなければならぬ。將來の爲の用途にむけたる限界の一グルデンの現在に於ける効用（従つてそれは例へば一年の後に得らるる限界効用の割引せられたる大きさ）が現在の用途に於ける限界の一グルデンの効用に等しきやうに、この用途への財の割當が行はれる。

此の如く、將來の用途にも現在の財を割當てると云ふことだけからすでに蓄積が行はれる（私は

こゝに蓄積と節約と云ふことを同じ事柄をさすものとして用ふる。この蓄積は云はば自動的のものであり、而して何等の利子が支拂はるることなくとも行はるるはずである。これだけの過程に於ては、代償を必要とするところの犠牲と云ふものは未だ行はれてゐない。蓄積が此限界を越えて行はるるに及び、はじめてそれは犠牲を意味し、代償を必要とするに至るものである。その際には、現在に於て限界以内の地位に於ける用途の財を將來に於て今の限界以外の地位に於ける用途にむけることになる。即ち、現在用途に於ける限界效用と、現在見積りの將來用途に於ける限界效用とは相等しいはずであるが、現在用途の限界單位よりも效用の大なる單位を、將來用途の限界單位よりも效用の更に小なるところに割當てることになる。前者に於て多くの效用が得られ、後者に於て少くの效用が失はれる。節約はここに犠牲をもつて行はれる。云はばそこに制欲があるわけである。此犠牲又は制欲が行はれうる爲には當然そこに代償あることを要する。即ち將來に於て此代償が與へられ、それが更に效用の低い用途に充てらるることにより、現在失はるだけの效用の差額（これだけが前述の犠牲であり制欲である）が償はるることを要する。此代償即ち利子の高さを決定するものは節約の限界的犠牲である。云はば節約せらるる最後の財單位の節約そのことに伴ふ犠牲の大小が、之を代償すべき利子の高さを決定する。

さて此カアヴァアの立論に於て注目すべきは、其自動的蓄積の理論にある。私は自らとるところの蓄積の説明の仕方が全く同一の方向に動かねばならぬことを認める。ただ更に如何なる點を

つき進みて考ふべきかについては後に述べよう。なほ次に注目すべきはここに述べたる犠牲又は制欲の内容の特異性である。前述の説明の中には二の重要な事項がある。一は將來に於ける欲望の充足を低く評價することである。例へば一年後の效用一五を現在の效用一〇に等しと見ることである。今の一〇をすてるとすれば而してその代りに將來一〇を得るとすれば、現在に於ける享樂を延期することに伴ふ五の犠牲があると云ふことにもなる。ところが、カアヴァアの説明に於ては、この意味の犠牲は利子の説明に何等積極的な役目を營むでゐない。此犠牲をさける爲に、財の現在用途に於ける割當と將來用途に於ける割當、從つて蓄積の大きさが變化を受くるだけのことである。蓄積が無費用に行はると云ふ結論の上には何等の影響もそれから來らない。

他の事項はカアヴァアの目ざしたる現在用途から將來用途への轉換に伴ふ犠牲である。この犠牲又は制欲はカアヴァア以前の制欲説に於て全く利子説明の爲に取り入れらるるところのなかつたものである。此意味に於て、カアヴァアの利子説はそれまでの制欲とは全く方向を異にするとも云へる。而して、他の制欲説に於て全く考の中にとり入れられない要素を以て利子を説明するものであり、他の制欲説によりて中心とせらるる要素を以て利子を説明せざるものであると云ふことは誤りでなからうと思ふ。私は自らこれに批評を加ふるまへに、今まで如何なる批評が加へられてゐるかを見たい。

私は茲に一の斷り書きを加へなければならぬ。カアヴァアの利子理論に關する前述の説明はベエム・バ・ヴァクの解説によ

1) Carver, The Place of Abstinence in the Theory of Interest, Quarterly Journal of Economics, October, 1893; Böhm-Bawerk, Geschichte u. Kritik der Kapitalzinstheorien, 4te Aufl. 1921, S. 496 ff.

るものである。けれども、私がカアヴァアの『分配の理論』にあらはれたる利子理論を解釋するところによれば、前述の解説にはなほ問題とすべきものがある。果してカアヴァア自身他の制欲説の説くところの制欲そのものが利子を決定する作用と云ふものを全く認めなかつたと見るべきであるか。これについてはなほ分析を要する點がある。けれども、私は今これに立入りたくない。それはカアヴァアの所論精緻を極めてゐるけれども、中に數多の混亂があり、誤謬があり、而もこれを一々指摘してみたところで、私の考察の上にさまで有益の結果をもたらすとも思れぬからである。特に興味を有する人々は同書、特にその二三一頁乃至二五〇頁についてみられたい。²⁾ベエムの解説は鋭くも大體をつかんだものとして許しうであらうから、私はそれを基本にして論を進める。

三

ベエムがカアヴァアの此見解に對して下したる批評の要點は一語につきる。カアヴァアは原因と結果とを混同してゐる。蓄積がカアヴァアの述べたる意味の制欲の行はるる所までに進むのは既に利子あることを前提としてゐる、云はば利子の結果であつて利子の原因ではない。更に進みて考へよう。一般の制欲説主張者は現在財よりも將來財が低價のものと見らるるところに、制欲の内容を認めてゐる。即ち將來に於ける一五の享樂が現在に於ける一〇の享樂と同様に見らるるところに、即ち現在の享樂を選び、將來の享樂を待つことがある制欲を意味すると云ふ事の中に、利子の原因が存してゐる。現在一〇の價值ある財を生産の爲に利用して翌年一五の價值の生産物を生ずるとする。翌年の一五の價值を現在の一〇の價值と等價のものとすれば、今年一〇の費用を投じて生産が行はれ得る、而して價值の超過即ち利子は五であらう。カアヴァアの示して

2) Carver, Distribution of Wealth, 1919, pp. 231 et seq.

る事實は事實として誤つてゐない。ただ、利子を導き出すべきところから導き出して説明しない、而して利子の結果そのものを原因と見ちがへるに至つてゐる。³⁾

アレキサンダー・マアルはこれに對して次のやうな批評を下してゐる。ベエムの此批評は當を得ぬ。なるほど、所謂自動的蓄積の程度を越えて節約の行はるる場合には、效用の多き現在用途からその少き將來用途に移すゆゑの犠牲がある。此犠牲が甘ぜらるることは勿論報償を豫想してゐる。それが利子を豫想すると云へぬこともない。けれども、此報償即ち資本用役の需要價格はカヴァアによつて十分に説明せられてゐる。蓋しカヴァアが資本用役の供給は蓄積に伴ふ犠牲によつて説明したると共に、其需要はすべてこれを限界生産力説によつて説明したることをさすのである。さうである以上、結果と原因とを取りちがへたのでもない。そこに缺陷があるとも云へず、又循環論があるわけでもない。ただカヴァアが正當なる前提から出發したか否かと云ふ問題のみがある。經濟主體が現在のつよき強度の欲望の充足を、將來の強度の弱い、しかし總計に於ては多い欲望の充足の爲に、斷念すると見られてゐるが、これが果して事實であらうか。

此問題は否定せらるべきであると云ふ。何人も將來に於て其食物の欲望を豊に充足せしめる爲に現在に於て餓えるものはないであらう。何人も將來豊に消費しよう爲に享樂財の消費を現在節約しないであらう。ただ外見的なる例外とも見るべきものは、欲望が將來に於て相對的に増加することの見込まれる場合である。例へば漸く老境に入りて収入は減じ、而も兒女が漸く長じて出

3) Böhm-Bawerk, a. a. O., S. 500-501.

費が加はらむとする時である。此時は極度に現在の欲望を切りつめて將來の爲に備へる。けれどもこれは其實、現在の欲望充足を極度に押しつけようとするのではない。欲望の或程度に於ける充足を將來に於ても保證しようとして、財の現在と將來とに於ける分配を合理的ならしめたのに外ならぬ。⁴⁾

私はこのマアルの批評はベエムの批評の反駁に關する限り、全く正當なるものであると思ふ。カアヴァアに於ては、利子を説明するところの資本用役の需要、及び其供給の分析が共に與へられてゐる。故に、將來の爲に現在の欲望充足を犠牲にする意味の制欲が利子の高さを定めることを主張するにしても、實は此高さが、需要と供給との出會ふことによつて定まることを述べるのである。而して、供給がそこまでの制欲を伴つてなされると云ふのは、一般の商品に於て價格までの生産費を投じて限界企業が生産すると説くのと、何の差異もない。所謂そこに缺陷もなければ循環論もない。進みてまた、カアヴァアの前提とする事實、即ち蓄積が現在を犠牲にして將來の欲望充足を豊ならしめると云ふ事實が認められずと云ふ主張もたしかであらう。而してカアヴァアの利子理論が誤れる前提から出發してゐるから正しからずと云ふマアルの結論も認めなければならぬと思ふ。

ここで私見をのべたい。すべて資本の蓄積は自動的に行はれる、云はば無費用に於て行はれる。其根本の動機は、所得の處分(敢て處分と云ふ、それは必ずしも消費ではない)の時間的分配

4) Alexander Mahr, Abstinenztheorie und Lehre von der Minderschätzung der Zukunftsgüter. Zeitschrift f. Nationalökonomie, Band II, Heft 1, S. 63 ff.; ditto Untersuchungen zur Zinstheorie, 1929. S. 66 ff.

に於ける均衡である。經濟主體はつねに其所得に種々なる用途を與へる。一部分は現在の消費のために、又一部分は將來の消費の爲に、又残りの一部分は將來に於ても消費に向けらるることのない蓄積の爲に。此最後の用途によつて満足せらるる欲望は一種の權力意志、即ち財産を誇示しようとする欲望、及び守錢奴的な蒐集そのことの欲望である。何れにせよ、各用途にみてたる限界單位の貨幣量が相等しき效用を與ふるやうに割りあてられる。考察を簡單ならしむる爲に、最後の部分だけを除いて考へて見る。

二の用途への分配に對して、將來財低價の傾向、即ち現在の欲望充足よりも將來の欲望充足を低く評價する傾向がどう作用すると見るべきであらうか。合理的なる經濟主體である限り、かかる傾向に支配せられずと云ふことは斥けがたいであらう。けれどもまた現實の主體が必ずしもさう云ふ合理的なる主體でもない。かかる傾向に支配せられるとするならば、現在の用途にあてられたる限界單位の價值と、將來の用途にあてられたるその割引せられたる大きさが相等しきやうに、所得の割當てが行はれるであらう。而して蓄積が自動的に行はれると云ふ結論には何の變化も來ない。主體はただ欲望充足の極大を求めて此蓄積を遂行するのに外ならぬ。けれども更に進みて、限界の蓄積については利子と云ふ對價によつて犠牲、即ち蓄積のための制欲が行はることを認むべきではなからうか。所謂生産者餘剰の見解を此場合にも適用すべきではなからうか。けれども利子が拂はれるからとて、財の用途の時間的分配に於ける均衡と云ふ原則がやぶらる

ることではないはずである。ただ各の時期に於ける用途の價值均等のみが求めらるるであらう。さうであるならば、現在の欲望充足の爲の財がどれだけ切りつめられてゐても、それは欲望の極大充足のためであり、従ひて蓄積は自動的にのみ行はれてゐる。利子がない場合から利子がある場合に入ると、前者に於ける現在用途から更に多くが將來用途にむけられると云ふカアヴァアの主張は成立しにくい。將來に於て利子が與へらるるならば、將來の欲望は一層豊富に充さることになる。それ故に、將來用途から現在用途へ逆にふりむけられるのではないか。カアヴァアの云ふところと正に反對のことが事實にあらはれるはずである。事實についてみても然り。金利の騰貴が蓄積の傾向を強むるとは云へぬ。金利の低下は將來金利によつて衣食しようとする人たちをしてその節約を一層多からしめる傾向があると見られてゐる。

要するに、資本の蓄積は如何なる場合に於ても、自動的に行はれる。たとひ、苦しい生活の中から切りつめたにしても、その節約は全體の欲望充足を——長い時期を通じての——極大ならしめる爲に行はれてゐる。將來の享樂をまつにしても、此待つことは、最大の満足を得るためのまつことであつて、何等かの代償によりて償はれねば此蓄積の全部又は一部が止むであらう如き制欲の要素があるとは考へられぬ。今まで將來の消費にみてる見込のない蓄積部分を省いたのであるが、之を入れて考へるにしても結果は同様である。資産を作らうと思つて蓄積するものが、利子が高くついて増殖の速度がひとりでに加はるならば、現在の欲望にあてゐる所得部分を少しは増し

こそすれ、之を更に切りつめるとは考へにくいのではないか。

四

現代に於ける待忍説の最も代表的なるものを求めるとすれば、それはマアシアルの利子學説であらう。マアシアルに於て利子は資本用役の需要の側からと其供給の側からと説明せられてゐる。これは勿論、其價格理論に根ざすものである。生産費説の上に立つたシニョオアにあつては、此二の側から説明をすすめることは必ずしも必要でなかつた。マアシアルは一方に待忍を數ふると共に他方には生産性をあげてゐる。資本の *prospectiveness* と *productiveness* と。

前者は待忍である。資本を蓄積して生産物を將來に於て得る爲には、現在を將來の犠牲に供しなければならぬ。享樂を延期して、將來をまたねばならぬ。此犠牲が即ち待忍^{ウェイトイング}である。之を制欲と云ふのは必ずしも正しくない。資本蓄積は主として富豪によつて行はれる、彼等にありては、制欲はまづ行はれぬ。云はば、享樂の延期、即ち待忍があるだけである。マアシアルにありては、これが勞働とならびて數へらるべき苦痛の内容を形づくつてゐる。さて資本が社會に需要に應ずるほど十分に供給せらるる爲には、此資本形成の苦痛、即ち待忍の犠牲に對して十分なる報償、即ち利子 (*reward of the sacrifice involved in the waiting*) が支拂はれねばならぬ。これは社會に十分なる勞働の供給をひき起す爲には勞銀が支拂はれねばならぬと同じである。勿論勞銀なくし

ても労働をしようとするものが若干はある。同様に、利子なくとも資本の蓄積がある程度まで行はれはする。けれども資本の用役の需要に應ずるだけの其供給がある爲には、限界の節約者(marginal savers)に對して十分なる報償を必要とする。従ひてそれ以外の蓄積部分に對しては蓄積者餘剰(saver's surplus)が與へらるるわけである。

『即ち資本需要は主として資本の生産性から起り資本が致す奉仕から起る。例へば資本は單に手をもつて行ふよりは、羊毛の紡績製織を容易ならしめ、或は苦しんで手桶を以て水を運ぶ代りに必要に應じ何時にても自由に水を出すを得せしめる等の奉仕を致すのである。之に反して資本供給は次の事實によつて制せられる。即ち人は資本を蓄積する爲に期望的に行動せねばならぬ事實である。人は待忍し貯蓄せねばならぬ。將來の爲に現在を犠牲とせねばならぬ。』

『將來の爲にする現在快樂の犠牲は經濟學者によつて制欲とよばれて來た。併し此用語は誤解せられて來た。蓋し富の最大蓄積者は非常の富者であつて彼等の中の或る者は奢侈生活を營んで居り、節用の轉換用語の意味に於ての制欲を確に行つてゐないからである。』この用語は誤解せられ易いから、之を避けて富の蓄積は一般に享樂延期の結果、又は享樂待忍の結果であると云ふ方がいゝ。更に云ひかへれば、富の蓄積は人間の期望性に依存する。⁶⁾

『資本一般は絶えず特定生産業に於て労働と雇用分野を争ひつゝあるが、なほ資本自体は労働及び待忍の體現者であるから、競争は實質的には多大の待忍に補助せらるる一種の労働と僅かの待忍に補助せらるる他種の労働との間に行はれる。⁷⁾』

五

さてこのマアシアルの利子理論は云ふまでもなく、資本用役の需要の側と供給の側とを説明するものであるが、其特徴は、此供給の説明原理を待忍に求むるところにある。此待忍の作用についてのマアシアルの見解に對して、今まで如何なる批評が下されたか。私はその代表的なるもの

5) 大塚氏譯、經濟學原理、第一分冊、一六七頁
6) 同、第二分冊、一九三頁
7) 同、第四分冊、七九頁

として、ベエムのそれを考へたい。ベエムによれば、マアシアルの數多き敘述は待忍が犠牲を含むと云ふ主張の基く事實は大衆が將來の満足よりも現在の満足をえらぶと云ふ心理學的事實であることを示してゐる。けれどもわれらが現在の喜びを將來の同じ大さの喜びよりも選ぶと云ふことと、將來の満足を待つことを獲得の費用を高めるところの犠牲と感ずることとは、マアシアルの學說に於て、同一の心理學的事實の全く異なる表現の仕方である。併しながら事實に於ては、此二は異なる表現の仕方ではなく、異なる把握の仕方である、加之相衝突するところの把握の仕方でもある。従つて二者を同時に支持すると云ふことは不可能のことである。この事を例について説明する。

上に述べたる心理學的事實は同じい、しかし時期だけが異なる享樂的目的に對して異なる大さの勞働又は貨幣犠牲が拂はれると云ふ作用をもつて来る。例へば一〇の享樂目的に對して、それが卽座に得らるるものであるならば、一〇に等しいまでの勞働又は貨幣犠牲を拂ふことを辭しないであらう。しかしそれが一年後五年後に得らるるとするならば、前述の心理學的計量が存立して居り、割引歩合が一〇%である限り、精々それぞれ九又は六の勞働又は貨幣犠牲をしか支拂はぬであらう。マアシアルもベエムもともに認めてゐる前述の事實は次の二の解釋を許すであらう。一の解釋の仕方はかうである。時間的距離は享樂目的の大さを小さくする。われらは將來の效用を單にそれが將來のものである故に、現在のそれよりも低く評價する。將來の喜びの現在に

於ける價值は一〇よりも小である。一年後のものであれば九、五年後のものであれば六である。であるから、現在に於て、前者に對しては九、後者に對しては六以上の犠牲を拂はぬであらう。此場合、九又は六は勞働又は貨幣としての犠牲の大きさを示すばかりではない、總犠牲の到達する最大の大きさを示してゐる。だから、九及び六の勞働又は貨幣犠牲の外に待忍と云ふ添加的犠牲の加はる餘地はない。目的とする喜びを九又は六のものと現在に於て評價する以上、九又は六の犠牲以外待忍をも加へて一〇の犠牲をそれに支拂ふと云ふことは、全くあり得ない。

他の一の解釋の仕方は勞働又は貨幣に於ける犠牲の外、待忍と云ふ犠牲の存在を認める。それは次のことを許してかからねばならぬ。一年又は五年の後に一〇の價值をもつであらう將來の享樂目的の見込は勞働と待忍とを合せて、一〇だけの犠牲を拂はせるものであると云ふことを。けれども、將來の一〇の享樂を割引せず、やはり一〇の價值を現在に於てももつと見るのではなくては、これに一〇の費用を支拂ふとは考へ得られぬはずである。故に、制欲説又は待忍説は今の例に於けるところの一〇と云ふ將來の享樂又は生産の目的を割引せずに評價するからこそ、勞働と待忍との合計一〇までの費用を認めることになる。

だからわれらは、或は時間的距離が將來の效用を低く評價せしめると見るか、又は時間的距離が待忍犠牲だけ犠牲を多くすると見るか、この何れかを選ばねばならぬ。二者を同時に肯定することは全く不可能である。けれどもあるものは云ふであらう。一〇の將來價值は現在に於て六に低

く評價せられてゐよう、だからこれに六だけの労働しか拂はぬであらう、けれども、五年の中に一〇にまで其價值が高まる、これにつれて労働と合せて全犠牲が一〇になるまで待忍の犠牲を拂ふのは合理的のことではないかと。しかし、此見解も正しいとは云へぬ。二十ヶ年賦千圓の住宅を買はうか否かと考へるとき、住宅の現在價值を現在に支拂ふべき千圓だけと比較して決意することは出来ぬ。やはり住宅の現在に於ける價值と、支拂ふべき全金額の而も割引せられたる、即ち現在に於ける價值とを比較して決定すべきである。だから待忍說の場合に於ても、享樂目的の現在價值と、支拂ふべき犠牲の現在から評價されたる總額とを比較すると云ふ事實に基かねばならぬ。

ベエムの批評の根本はこれによつて略ぼ明にせられたことと思ふ。ベエム自身の主張してゐる時差說がどこまで支持せられうるかは、別に述べたことであるから、ここに論及しない。ただ將來の享樂を低く見つるものであると云ふ事實から、待忍と云ふ犠牲が労働の外に別に存立すると云ふ主張の導き出されぬと云ふことについてのベエムの主張は全く肯定してもいいと思はれる。⁸⁾

將來の享樂よりも現在の享樂を選ぶ。現在の享樂をやめて將來の享樂をとることには享樂の延期がある、此延期は現在の享樂の價值が大である限り、一の犠牲であり苦痛である。これが制欲說のめざしてゐる中心事實であり、而してマアシアルの待忍說とても其上に築かれてゐると云ひ

8) Böhm, a. a. O., S. 482 ff.

得よう。

けれどもこのことは、現在に割當てたる享樂を將來に延期することに伴ふ場合の苦痛である、將來に割りあてたる享樂を將來に於て享樂することに伴ふ苦痛ではない。而してどれだけの享樂を現在と將來とに割當てるかについては一定の原則が支配する。此原則の支配によつて現在に割當てたる享樂を將來に引きのばして享樂することを強ふるものは、合理的に主體が行動する限り、存在しない。而して、此一定の原則と云ふものは云ふまでもなく、財又は所得の時間的分配に於ける満足極大の原則である。享樂をいつまで延期するか、又は現在有する生産財を如何に處分して如何なる時期にどれだけの生産物をうるかと云ふことはすべて、此原則によつてのみ決定せられる。従つて其場合の享樂延期はそれ自體としては苦痛を伴ふやうに見えても、全體から見ると、満足を極大ならしむる爲に行はれ、従つて苦痛、犠牲を意味しない。寧ろこれに反することを行ひ、延期をしないことが犠牲を意味するはずである。同様の事情によつて、蓄積もまたすべて自動的である。蓄積がどれだけ行はるかを決定するのは、やはり一に、時間的分配に於ける極大満足の法則に従ふはずである。而して主體が合理的に行動する限り、此法則の支配から離れるところの蓄積は行はれ得ないはずである。即ち、すべての蓄積は何等の犠牲をも伴ふことなくして行はるはずである。さうすると、現在の享樂が高く評價せらるると云ふ傾向は此場合如何に作用してゐるか云ふに、それはただ、享樂財又は勞働、貨幣などの獲得手段の用途の時間的分配の仕方作用してゐるだけである。この傾向が全くない時と、此傾向の弱い時即ち割引率の低い時と、其強い時即ち割引率の高い時とは時間的用途分配の姿がそれぞれ異なるものとなる。ただそれだけのことで、此傾向のない時の蓄積が極大満足の方向を眼ざして居り、従つて何等の犠牲をも必要としないが如く、此傾向の極めて強い時の蓄積もまたさうである。此意味に於てカアヴァアの利子理論が自動的蓄積そのものの中に、何等の制欲の要素をも認めなかつたのは、當然のことであると思はれる。

マアルはマアシアルの云ふ如き待忍が極めて多くの場合に於て認められぬことを述べてゐる。其見方によれば、多くの欲望は現在に於て現實的ではなく、ただ將來に於てのみ現實的となる。これらについては、享樂を現在から將來に延期すると云ふことはないはずである。けれども、待忍説の見地から云へば現在に近き享樂ほど求められると云ふのであるから、現在に現實的ならぬ欲望についても、時間的距離の如何によつて待忍の大きさに大小あるはずであらう。將來への延期と云ふことはやはりそこにもある。又社會的勢力への要求から蓄積の行はるる場合にも、享樂の延期はないと云ふ。これはさうであら

う。けれども此等の點に於てマアシアルが誤つてゐるとしても、其利子理論は限界的節約者の待忍に對する報酬として利子を見るのであるから、かう云ふ場合の蓄積が制欲又は犠牲を意味しないことはマアシアルの利子論に對する批評とはなり得まい。

なほ、ここに財の時間的用途の分配を支配する法則と云ふのは、前にカアヴァアを中心として述べたところである。これを最も組織的に述べてゐるのはハイエクであらう。私も前にこれを基礎として時差説の第三根據の批評を試みた。それはハイエクに負ふ所が多い。

資本用役の需要の側はもとより生産力によりて決定せられるであらう。このことについては今立ち入るまい。而して、供給の側は決して制欲又は待忍の要素を含むのではなく、之によつて決定せられるのではなくして、云はば自動的無費用的な蓄積によつて行はれる。従つて生産力を示すところの資本用役の需要とこれの供給數量とだけから、利子の高さは決定せられるはずであると思はれる。供給價格の高さは此場合、何の作用をも含み得ない。

六

私は近代的形態に於ける制欲説の二の代表的なるものについて、多少の考察を述べた。もとよりこれは學說史的考察と云ふべきものではない。二の學說の吟味を通して制欲説又は待忍説に關する私見を述べようとするに止まる。最後に、シニオオアに於ける制欲説、云はば最も固有の意義に於ける制欲説の代表的形態に一瞥を投じよう。此場合に於ても、目ざすところは其吟味によつて私見を明にするにある。

シニオオアは生産要素を數へて、勞働土地及び制欲の三とする。一般にはまづ勞働土地のほか資本を數へるけれど、其見解によれば、資本はそれ自體、勞働土地の生産物であり、その中には

9) Alexander Mahr, a. a. O., S. 65 ff.; Hayek, Zur Problemstellung zur Zins-theorie, Archiv. f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik, Bd. 58, S. 517 ff. 1927.

此二者の外に制欲が含まれてゐる。此制欲と云ふ第三要素に對しては、勞働に對して勞銀の支拂はるるが如く、何等かの報償が支拂はれる。これ即ち資本利潤である。然れども享樂の斷念、又は享樂の延期であるところの此犠牲に對してかかる報償は如何にして成立し得るか。財の交換價值は效用と供給の制限とによつて定まるものであるが、事實上、多くの財にあつては買手にとつての生産費がその上限を、賣手にとつての生産費がその下限をなす。而して此二者は大抵相接近するが故に、生産費が交換價值を定めると云ひ得る。此生産費は勞働と制欲とを含む。交換價值の中には當然、此制欲に對する報償が含まれてゐるはずである¹⁰⁾。

ベエムは前にマアシアルに關して述べたるが如く、此シニオオアの制欲説に關しても二重計算であると云ふ批評を下してゐる。例へば或る一定の時期に於て一日の勞働を以て三尾の魚をとることが出来るが、また一本の果樹を植え十年の後にその果實を味ふことが出来る。後の場合には、制欲説の立場から云ふと、一日の勞働の外、十年の享樂延期と云ふ制欲の犠牲がある。けれども、當初、一日の勞働によれば即日三尾の魚を捕へ得る。その一日の勞働の中に魚の享樂は含まれてゐる。一日の勞働を果樹の爲に費すとき、一日の勞働自體の中に魚の享樂の斷念、從つて享樂延期が含まれてゐるはずである。それ故に果樹の爲の犠牲又は費用は一日の勞働であつて、その上に制欲が加はるものではない。即ち勞働と制欲との合計が實際の費用となるものではない。此合計を以て費用となすものは費用の一部につき二重計算をなすものである。即ち魚をとる

10) Senior, Outlines of the Science of Political Economy, 5. ed., 1863.

ことにすてたる一日の勞働を費用とする外に、魚によつて得られたる即時享樂と云ふ利益の喪失をも、費用の中に算入するのである。勿論一日の勞働を果樹の爲に費す場合に失はるる魚の效用全部を果實の費用として二重計算をなすのではない、けれども其中の即時享樂をぬき出してそれが失はれたるものとし、従つて、享樂延期をも一の費用とする。これはその部分に關する限り、費用の二重計算と見ざるを得ぬ。これを避けようとすれば當然、果樹の爲の費用は一日の勞働である、制欲は其中に含まれぬと云ふ外はない。この考方を貫いてゆけば、資本の中に制欲と云ふ第三の費用が含まれてゐると云ふ見解がたてられなくなる。従つて、利子は制欲の報償であると云ふ見解が成立し得ない。

さて私は前に、利子が資本用役の需要と供給との両面から説明せらるべきことを述べた。而して、シニョオアの制欲説は供給の側の事情を制欲と云ふ費用によつて明にしたるものである。而して價格について生産費説をとるところから、此供給即ち生産費の側が明にせらるると、此立場からはやがて利子と云ふ價格が説明せられたことになつてゐる。マアシアルに至ると、更に之に對立するものとして、生産力が利子の決定因子として同様に重要な地位を占むることになる。

時差説のたつところも、制欲説の立つところも、將來の享樂よりも現在の享樂が選ばれると云ふ一事實にある。生活の合理性を根據として之を否定する見解はありうる。之を認むるときに此事實は二様に解釋せられてゐる。一方、將來の享樂そのものが低く評價せられる、云はば享樂の

延期が將來の享樂の低價の基礎をなしてゐる。これは時差説の見方である。他方、享樂の延期が將來の享樂をうるための費用と見られてゐる。ただ此場合、將來の享樂は現在に於て、將來に於けるものと同一の大きさに見らるることを前提としないであらうか。云はば割引の行はれぬことを前提としないであらうか。私はさうでなかつたら、將來の享樂は多くの場合に於て斷念せらるると思ふ。事實に背く結論をうむと思ふ。何れにせよ、將來の享樂は此場合、割引せらるるとするも、享樂延期は費用の側へ、及び、獲得對象（效用）の側へと二重の計算が行はるることを認めねばなるまい。

私自身の立場を云はう。なるほど享樂の延期はあらう。けれども、これは財の時間的分配に於て極大の效用を求むる過程に於ける一の部分的な事柄である。それは犠牲と云ひうべきものではないであらう。同一時期に於て限界效用の水準を求める。林檎一つをやめて菓子一つを加へる。此時、林檎一つをやめることは享樂の拋棄であるけれども、全體として見れば效用の増加であり、それが苦痛を意味するのではない。これは前にも述べたる通りである。さうすると享樂の延期も節約も、蓄積もすべては自動的に、而して、無費用に行はれる。従つて資本用役の供給に生産費又は費用と云ふものはない、ただ供給數量が制限せられてゐるばかりである。需要の側は生産力の事情によつて決定せられる。需要函數と供給數量との二から利子は決定せられる。利子の決定に於ては費用が作用をもち得ず、否、作用をもち得る費用と云ふものが考へ得られぬ。

そこでなほ一の問題が残るやうに見える。無費用の蓄積があり、その數量に従つて利子が定まるにしても、利子の存立は此蓄積の上に反作用を及ぼして有費用の蓄積を作るのではないかと云ふ問題、即ちこれである。蓄積者又は貯蓄者餘剰などと云ふ概念はすべて此問題にからみつてゐる。而して利子の高さに従つて蓄積が増加するものと考へられてゐる。けれども利子は各主體によつて何の爲に求めらるるか。それによつて享樂の生活を充實する爲にか、後の生計の安固の爲にか、財産蓄積の爲にか。最初の目的の爲であるならば、利子が高くなることによつて蓄積は減少する。後日の享樂の費用たる利子は割合に増加するから、蓄積を切り下げることが此目的の爲に有利である。後日生計を安固ならしむる爲ならば、勿論のこと利子が高まれば蓄積は減少する。財産蓄積そのことに目的ありとしても、利子の増加はひとりで蓄積の速度を早めてくれる、現在の蓄積を利子が高まる故に高めると云ふ傾向は作用し得ないはずである。要するに貯蓄者餘剰の概念はただ一の類推のみ、而も誤れる類推であらう。利子がある場合にも、與へられたる利子歩合の高さに應じて各主體は財又は貨幣の各時間的用途に於ける最も有利なる分配を行ふであらう。而して、そのときにも蓄積はすべて自動的に行はれ、従つて無費用であらう。利子の成立は此分配の姿を改めさせる、しかし蓄積を無費用なるものから費用を要するものに改めることではないはずである。(一九三二、一〇、二、朝十時)